



限界社畜。

間違えてお隣さんちの
ベッドで寝てしまい、

通報されない代わりに

おまんこガン突き

された上に、なぜかそのまま

世話を焼かれるように

なっちゃいました

「限界社畜。間違えてお隣さんちのベッドで寝てしまい、通報されない代わりにおまんこガン突きされたうえに、なぜかそのまま世話を焼かれるようになってしまいました」

——
ピピピピピッ

「……………ん、うづ……………うそ、もう朝あ……………?」

耳元でけたたましく鳴り響くスマホのアラーム音。ああ……………今日もまた一日が始まってしまう。

寝起きでカッスカスになった声で呻きながら、現実逃避をしたくて毛布を頭から被り直す。

「睡眠時間、四時間しか取れないのに……………疲れすぎてあんまり熟睡できなかったなあ……………」

ずん……とのしかかる体の重さに疲れが全然取れていないことが分かってしまふ。

昨日（というか日付けが変わったので今日なんだけど）も日付けを跨いで随分経ってからの帰宅だった。

「うー……このまま二度寝したい………」

毛布にくるまりながら、現実逃避をする。この居心地のいい場所から離れたくない。

（今日の予定は……打ち合わせ三件とデザイン提出の締切が二件……隙間の時間でまだ手付かずの資料作成をして……）

……もちろんそんな訳にはいかないのだけど。今日も今日とて仕事は山積みなのだ。

社会人になってはや数年。憧れだったWeb関係の会社に入社できた時はそ

れはもう嬉しかった。

でも、やる気に満ち溢れて仕事ができしたのは最初の一年くらいで。今では圧倒的な業務量を夜遅くまで……時には休日出勤をしながら死んだ目で捌いていく日々。

「ぶー……………起きるかぁ……………」

暫くベッドの上でもぞもぞ蠢いてから、意を決して体を起こした。

熱いシャワーを浴びて無理矢理目を覚まし、手早く時短メイクをしていく。昼む時間がなくてこんもり積んである洋服から、適当に服を選んだ。

「朝ごはんは……………時間ないし今日もいいや」

というかいつもの如く、胃がキリキリしてお腹が空かない。まともな食事をとったのは随分前な気がする。

まだ始業時間には間に合うけど、早めに出勤して打ち合わせ資料を作らなきゃ。床に落ちてた通勤バッグを掴んで、バタバタと玄関の扉を開ける。

ガチャリ

「あっ……」

廊下に出たその時。隣の部屋の扉の前にちょうど人が立っていた。

反射的に声を漏らすと、その人も私の存在に気がついたようで顔をこちらに向ける。

（お隣さんだ……）

程よく筋肉のついた、しなやかな体つきの長身の男性。

半年ほど前、通勤時間を少しでも縮めたくてこのマンションに引っ越した時に軽く挨拶だけさせてもらった。

少し気だるげな雰囲気。無造作に流された黒髪。黒い上下スウェットというかなりラフな格好なのに、その整った容姿で全てが様になっている。

「あ、お、おはようございます」

「おはよう。これから仕事？」

生活リズムが違うのか、普段はあまり顔を合わせる機会はない。ので、不意打ちのお隣さんとの出会いに声が詰まってしまった。

そんな私の様子も気にせず、ゆったりと落ちついた声で挨拶を返してくれる。

「あ、はい。そうですね」

「そっか。朝早くから頑張ってんね。気をつけて行ってらっしゃい」

（うう……朝からその顔は眩しすぎるっ………！）

キラキラと効果音が付きそうな笑顔に目がシパシパする。朝イチでのイケメンの破壊力は凄まじく荒んでいた心が少し回復した気すらしてきた。

耐性がなさすぎて「いや……そ、そんな事ないですよ、い、行ってきますね」とめっちゃめっちゃ挙動不審になってしまう。

ぺこぺこ頭を下げながら、お隣さんの前を通り過ぎようとしたその時。

ズルッ

「わっ！」

履いていたパンプスのヒールがちょうど小石をピンポイントで踏んでしまった。

ぐらりと体のバランスを崩し、前によろけてしまう。

「っ!!」

「あゝ……びっくりした」

硬いコンクリートの衝撃が来るであろうと身構えていたら、ふわりと体を支えられる感覚。

見ると、がっしりとした逞しい腕がお腹の辺りにまわされ、片手で軽々と抱きかかえられていた。

「大丈夫？ 足くじいてない？」

「……っ！ わ、わ——！ す、すみませんっ！ 大丈夫です！」

咄嗟に助けてくれたお隣さんが心配そうに私の顔を覗きこむ。鼻が触れてしまいそうなくらいの近さに思わず叫んでしまった。

もういい大人なのに。ここまで盛大に転ぶなんて。しかもこんなかっこいい人の前で……！

（は、恥ずかしい……絶対落ち着きがない女だっと思われてる……）

恥ずかしさやら申し訳なさやらでいっぱいになる。

触られているところが妙に熱く感じてきた。慌てて体制を立て直して、しゅばっ、と素早く体を離れた。

「なら、よかった。咄嗟に体触っちゃってごめんね」

「い、いえ、そんな……っ！……こちらこそすみません」

どうしよう。私の顔いま絶対真っ赤っかになってる。じりじりと頬の熱を感じながら、なるべく見られないように頭を下げながらお礼をする。

「朝から本当にすみません。助けてもらって……ありがとうございました」
「気にしないでいーよ。怪我がなくてよかった」

なんて事ないようにさりとて言うお隣さん。外見のみならず心までイケメンなのだろうか。

「ありがとうございます」と最後にもう一度頭を下げ、その場を後にする。

(……はあ、朝から色んな意味でどきどきしたなあ……って、時間やばっ！急がなきゃ……っ！)

顔に集まった熱はまだ引いていかない。

ふと、腕時計を見ると元々出る予定だった時刻を過ぎていて。

「……………」

バタバタと慌ただしく廊下を進む。そんな私の背中をお隣さんがじっと見つ

めていたのにも気が付かなかった。

「うぐ……………疲れたあ……………眠いよお……………」

フラフラの体を何とか引きずりながら夜道を歩く。現在の時刻は午前三時過ぎ。

あの後、出社したら更に突発で業務が入ってしまい、いつも以上に目まぐるしい一日だった。

（会社の近くに引越して通勤時間短くなったけど……………終電を理由に帰ることも出来なくなっちゃったなあ……………）

半年前の自分の判断に後悔しかない。

なんとかマンションのエントランスに辿り着き、エレベーターに乗り込む。立っているのもしんどくて、ぐったり壁にもたれかかった。気を抜くと、こくりこくりと意識を手放しそうになってしまう。

「……………つ、だめ。もう少しで部屋につくから……………」

連日の深夜残業でほとんど寝れてない体は限界で。自分に言い聞かせながら、なんとか意識を繋ぎ止める。

「明日は……久しぶりの……休日出勤じゃない……本当の休みだ………一日寝てよ………」

エレベーターが止まり、扉が開く。

ふらふらと廊下を歩いている最中も視界は途切れ途切れになってしまつて。眠すぎて思考が全く働かない。

（う………やつとついた……。えーっと鍵、鍵………あれ？）

ごそごそとバッグから鍵を取り出そうとしていたら、ガチャリと扉がそのまま開くことに気がつき、首を傾げた。

「………？まあいいか………」

多分朝急いでて鍵をかけるのを忘れたんだと思う。いつもだったら自分の不用心に反省するところだけど、今は一刻も早く横になりたい。そのままドアを開けて中に入る。

「うー……………も、だめ……………ねむい……………」

家に帰ってきた安心感に眠気がいよいよ限界を迎えた。
半分眠りながら電気もつけずにそのまま寝室に直行する。

(……………あれ、部屋の雰囲気がいつもと……………違う……………ような……………)

暗闇でぼんやりみえるインテリアや家具の配置に一瞬、違和感を覚える。けど、今の頭では何も考える事ができなくて。

気のせいかなぁ……………。と片付け、着ていたトップスとスカートをその場に脱ぎ捨てた。ブラの締め付けが嫌でホックを外して、ズルズルと抜き取る。

手早くキャミソールとショーツだけの姿になると、そのまま念願のベッドに

勢いよくダイブした。

ドサッ

「……………っ!？」

「んー……………あったかい……………」

外が肌寒かったせいだろうか。ベッドがじんわりと温かく感じる。念願のベッドはぬくぬくとして気持ちがよくて、すり……………と頬を擦り付ける。

なんだかいつもよりマツトレスが硬い？ 感触が違うような気がしたけど……………それもきつと気のせいだろう。

疲れきった体は一瞬でふにやりと弛緩し、あっという間に意識を手放したのだった。

「……………ん」

柔らかい陽の光が顔に降り注ぐ。

もう朝になっていている事が分かるけど、深く沈んでいた意識はまだ半分も覚醒してない。瞼が重くて開かず、まあ、どうせ休みだし……。と、二度寝をキメようとした。

(……………？なんか……………ベッドの感触が変……………？生き物みたいな暖かさで……………実家で飼ってるわん太郎みたい)

ちなみにわん太郎は雄の黒柴だ。よくこうして抱きついて一緒に寝てたのを思い出して、懐かしさに顔が綻ぶ。

(最近実家に帰れてないな……………久しぶりにあのモフモフを撫で回したい……………今度無理矢理にでも時間作って会いに行こうかな……………)

ぽやぽやと寝ぼけた頭で遠い地の愛犬に思いを馳せる。
もぞり、と体勢を変えようと身動ぎをしたその時。
ぐに。

(……………ぐに?)

再度違和感が走った。柔らかいけど弾力があつてすべすべした、まるで……
人の肌のような感触。

とうかここは実家じゃない。自分の借りているマンションの部屋なはずだ。
わん太郎もいなければ、他に人なんているはずが無いのに。

「……………つ!!」

そこまで考えて一気に意識が覚醒した。

心臓がひゅんっと縮みながらも、ガバッと顔をあげると。

「~~~~~お、おおおとなりさん!？」

思わず大声で叫んでしまった

昨日の朝拝んだばかりの顔面が至近距離に現れる。きめ細かい肌に長く縁取られたまつ毛。瞼は閉じられ、すうすうと寝息をたてる姿に頭がパニックになった。

（な、な、な、なんで……!?何がどうしてこんなことになった……!?と、というかここは……）

どうやら仰向けで眠るお隣さんに上から抱きつくようにして寝てたらしい。慌てて上半身を起こして周りを見渡す。間取りは自分の部屋と同じだが、ベッドの位置も置いてあるインテリアも何もかも違う。全く身に覚えのない男の人の部屋。

（う、うううそ……も、もしかして……私、間違えてお隣さんちに入って……そのまま寝てたって事……?）

そういえば、フラフラで帰宅した時に玄関に鍵がかかってなかった事を思い出した。極限の疲れと眠気で判断力が落ちてたまたま鍵が開いてた一個手前の部屋に入ってしまったとしたら。

（ど、どうしよう……っ、これって不法侵入になるよね）

少しずつ状況が分かってきて背中に冷や汗がたらりと垂れる。
この場をどうしたらいいか分からず、おろおろしていると。

「……………っん」

「っ!？」

私の気配を感じ取ってかお隣さんが小さく声を漏らした。

そのままゆっくり瞼が開いていき、眠たげな瞳がぼんやりと私を映す。

「……………あ、あの」

「……………ん?……………ああ、やっと起きたんだ……………ねえ、君、昨日のこと覚え

てる？」

「っ！」

少し掠れた低い声。寝起きに隣の部屋の住人が自分の上にのしかかっている……というとても状況にパニックにさせてしまうかと思いきや、至って冷静な反応だった。

どう話を切り出そうか迷っていると、お隣さんの方から話し始めた。

「ベッドで寝てたら夜中に急に何かが体にのしかかって来てさあ……びっくりして目を覚ましたら、君が俺の上に覆いかぶさってくーくー寝てたんだよ」

「~~~~っ!!」

「いやほんと……一瞬何が起きたかわからなくて。一応声掛けたけど君全然起きないし、あんまり気持ちよさそうに寝てるから退かすのも忍びねえなって……俺も眠かったからもういいかと思ってそのまま寝ただけだね」

お隣さんから語られる詳細を聞いて、とんでもない事をしてしまったと言葉を失った。

夜中に挨拶程度の付き合いしかない隣人が部屋に侵入して来るのはさぞホラーだったと思う。

「……………ほ、本当にすみませんでした！あ、あの嘘みたいに思えるかもしれないんですけど、し、仕事で疲れて帰ってきて、自分の部屋と間違えて、鍵が空いてたお隣さんちに入ってしまったって……そのまま寝ちゃったみたいで……っ！どんな理由でも不法侵入には変わらないんですけど、ど、どうか警察に通報だけは……！何でもしますので……！！」

事の重大さとこれから起こり得る事に対してガタガタ体が震える。お父さん、お母さん、後わん太郎も。ごめんなさい、もしかしたら私、明日ニュースで全国放送されるかもしれません。

全力で謝罪をしながら、とりあえずベッドから降りようとしたその時。

「……………ふーん」

「……………っえ」

お隣さんの声のトーンが低くなった気がした。がしり。と私の腰の辺りをがっちり掴まれる。これでは身動きが取れず、お隣さんの上に跨ったままになってしまう。

「お、おとなりさ」

「あのさあ……いま、何でもするって言った？」

「え、あつ、はい。私に出来ることなら………そ、その、お金とか……」

「ははっ、そんなのには興味ないけど。そっか………何でもね………自分から食べられに来てくれるなんてラッキーすぎるな」

「えっ」

（なんでだろう………いつもの、あの、人あたりのいい………お隣さんじゃない、ような………）

不意に、雰囲気が変わってゾクリとした。目元も表情も薄く笑っているのに、なぜかどこか怖くて。

最後ぼそりと呟いた事が聞き取れず、きょとんとしていると、ずり………♡と

掴まれた腰をそのまま後ろへスライドさせられる。

ごりっ♡

「……………っ！」

（えっ……………これ……………っ!?お隣さん……………の、お、お、おちんちん、勃って……………）

思ってもみない展開に目を白黒させる。

お尻にあたる硬い感触。スウェット越しでも分かるくらいに勃起あがった“それ”にビクッ♡と体が震えてしまう。

「あ、あの、お、お隣さん……………っ!?」

「何でもするって言ったじゃん。そんな格好で体の上跨られてさあ……………正直ちんこずっとイライラしてたんだよね」

「……………?っ、……………!!」

そんな格好……？　そう言われて自分の体を見下ろして……悲鳴をあげる。ノブラなうえに薄い生地のカミソール。胸の谷間はもちろん、生地の手でぶつくりと膨らんだ二つの突起までしっかり目視できてしまう。そして下半身に至ってはショーツしか履いてない。

この瞬間、他の服はベッドにダイブする前に寝ぼけながら脱いだ事を思い出した。

不法侵入に加え、お隣さんにとんでもない格好を曝けだしちゃってる……！　あまりの恥ずかしさに頭が爆発しそうなくらい沸騰していく。

「そのぽよぽよのおっぱいも、すべすべの太ももも、俺の体にぴったり押し付けてすりすり擦り付けられてさあ、……いや、ほんとよく俺朝まで我慢してあげられたなあって」

「ご、ごめんなさ……」

「何回も寝てる君の“ここ”にちんこずっぱり突っ込んでやろうかって思った。ねえ、悪いと思ってるならちゃんと責任とってくれるよね？」

「……っ、ん♡」

再度腰を揺すられ、お股におちんちんをゴリゴリ擦り付けられた。一瞬、ショーツ越しに敏感なところを掠めていって少し声が漏れてしまう。

「で、でも……っあ♡」

「でも、なに？何でもするって言ったじゃん？……それとも嘘だった？」

「…………っ」

「俺はこのまま警察に通報してもいいけどね。寝てたら知らない女に不法侵入されてましたって」

「っそ、それは……」

「困っちゃう？じゃあいいよね」

「ひんっ♡」

ぴんっ♡と指でキャミ越しに乳首を弾かれ情けない声が出る。

実際お隣さんに迷惑をかけてしまってるのは事実で。予想外の要求でも何でもすると言った手前、撤回はしづらい。

どうしよう………と悩んでいると、キャミの肩紐をするりと降ろされた。

「!!」

「はっ、乳首もう勃ってんじゃん」

胸元の布がズレて胸が丸出しになる。恥ずかしくて咄嗟に腕で隠そうとしたら、両手を拘束されてしまう。

「でもでもって洩ってた割に、これから起こること期待してんの？ぴんく色の可愛い乳首、ツン♡って勃起してるけど」

「う……ち、ちがいます……た、勃ってなんか……っ」

「違くねえだろ。あ、恥ずかしくて認めたくない？……なら否定できないくらい、もっとビンビンに乳首勃たせようか……ん」

「え、なに……、ひ……っ♡」

にゆる……♡とお隣さんの舌が乳首を這っていく。舌先で器用にくり……♡くり……♡と敏感な先端を弄ぶように転がされ、その度に背中にぞくぞくとした快感が走る。

「あ……っ♡……………ん、ふぅ……っ♡」

「声漏れてる。乳首気持ちいい？……………こうして……………ん、舌でぴちゃぴちゃ舐めてるだけで、簡単に君のここむくむく大きくなってきたんだけど」

「ち、ちが……………お、おとなりさん……………こんなの……………だ、だめ……………っ♡は、あっ♡だめ……………ですう……………っ♡」

口だけは否定してみるも多分バレバレだと思う。恥ずかしいのに腕を拘束されてるせいで身動きができない。

熱い表面がゆっ……………くりと乳輪をなぞっていったかと思いきや舌先でぴんっ♡ぴんっ♡ぴんっ♡と連続で乳首を弾かれて背中が仰け反る。

「ひっ♡あっ♡あっ♡」

「だめ？だめなのにそんな甘ったるい声出していいの？」

「はあ……………っ♡だ、だって……………お、おとなりさんが……………えっちな触り方するから……………あっ♡」

「えー俺のせい？違うでしょ。君がほとんど面識がない男でも乳首ちよっと舐められたら、あんあん感じちゃうエロ女なだけじゃん……………ん、ぢゅっ♡ぢゅっ♡」

「♡♡♡」

「ち、ちが……あっ!?♡あ~~~~♡あ、ち、ちくび、ちゅうちゅう吸っちゃ……っ♡♡♡」

ぬるり♡と粘膜と熱い口内に包まれる感覚。柔らかい唇に敏感になった先端を食まれ、そのまま思いつきり吸い付かれる。

ちゅ~~~~♡ぢゅっ♡ぢゅっ♡ぢゅるるるっ♡♡

(あ~~~~♡きゅ、急に刺激強くなった♡も、勝手に声でちゃう……っ♡お隣さんと、こ、こんな事、だめ、だめなのにな♡ち、乳首、こうしてえ……っ、強く吸われるの、腰震えちゃうくらい、つき、気持ちいいよ……っ♡♡)

「ん、んぐっ……♡」

「ん、腰ぶるぶるしてきた。やっぱ気持ちいいじゃん。ぢゅ……♡ちゅう……目元とろーんでさせて、顔真っ赤にしてさあ……分かる? 君今めっちゃめっちゃえろい顔してる」

「そ、そんなこと……っ♡はっ♡ああっ♡♡」

ぢゅっ……ちゅううう♡と緩急をつけて絶え間なく先端を吸われ、ひたすら喘ぐことしかできない。

快感に体の力が抜け、腕の拘束を解かれる。

お隣さんの胸に両手を置いてなんとか上半身が崩れないように耐えた。

「ひっ♡もう片方の、乳首も、す、吸われてえっ……♡あっ♡ふ、う、グ……っ♡」

「ぢゅ~~~~♡……っはあ、……これで一目見ただけで分かるくらいのビンビンの勃起乳首になったじゃん。ほら、見て。これでも違う？」

「……あっ、は、あ……♡」

「ん？ちゃんと答えろ。隣人に弄られて乳首勃起させて感じてますって言えよ。認めな。ほら」

「おっ……!?!♡~~~~っ♡♡だ、だめ……っ♡ち、乳首、両方指で……っ、引っ張っちゃ……♡あ、あ~~~~っ♡」

こり♡こりこり♡

ぷっくりと膨らんだ先端を指で摘まれそのまま下に向けてぎゅう……♡と引つ張られた。強いくらいの力なのに不思議と痛みはなく、むしろ体が悦んでいるのが分かる。

それだけでも刺激が強いのに、そのまま指の腹でしごかれ下品な声が出てしまっ。

「ひいっ♡……あっ♡……ぐ、う♡」

気持ちいい♡気持ちいい♡気持ちいい♡

頭の中はそれ以外考えられなくなる。こんな事いけない。とか、お隣さんの。とかストッパーになっていたものがどろどろと溶けていく。

「は、はい……♡お隣さんに……っ♡乳首、吸われて……っ、摘まれて……いっぱい感じてこんなに勃起させちゃいました……ああっ♡」

「そうそう。ちゃんと覚えてえらいじゃん♡……乳首だけでここまで感じてんの……えろすぎだろ。あ——、やば……ちんこ勃起すぎて痛くなってきた……」

恥ずかしさに震えながらもなんとか言い切ると、ご褒美のように更に更に乳首をぎゅう♡と抓られまた声が出てしまう。

びくびく震える私を下から眺めながら、ぼそりとお隣さんが呟くと、履いたスウェットを下着ごと下ろした。ぶるんっ♡と勢いよく飛び出たモノがそのまま私のお尻にベチンッ♡と当たる。

「っひゃ!？」

衝撃に体がビクッと跳ねた。

後ろを振り返らなくても分かる。ショーツ越しにお尻にごり……♡と擦り付けられる熱くて硬い感触。

「…………っあ、あの」

「ずっと生殺しだったからさあ。最初に言った通りもう余裕ないんだよね。しっかり体でお詫びして、っ、もううから……」

すり…………っ♡ずりっ♡ずり…………っ♡

「ひっ…………♡」

「はっ、下着びちゃびちゃに濡れてる。どんだけ感じてんの？……あー、ここにこうして……ちんこ滑らしてるだけでも気持ち……」

腰を両手で掴まれ、おまんこにガチガチになったおちんちんを擦り付けられた。

べっとり大きな染みを作ったショーツ越しに、血管をビキビキと浮かばせたおちんちんがずりゅ、ずりゅ……♡と行ったり来たりして。

卑猥なその光景に頭がクラクラしてしまう。

「ふっ……♡ん、んづ……っ♡」

こうして腰を揺さぶられてみると、まるでセックスしてるみたい……想像したらおまんこがきゅう……♡と収縮してしまった。

時々、ぷっくりと膨らんだクリをカリがくりゅ……♡と引っかけるように掠めていって、快感が蓄積された体には毒だった。

「っお、おとなりさん……♡お、おちんちん、クリにあたっ……っ♡」

「は、当ててんだよ。下着越しでもクリ勃たせてんの丸わかりじゃん。ちんこでこうやって……ぐりぐりぐりって押し潰されるの気持ちいいでしょ」

「あっ♡ふ……♡」

そうやって重点的に突起にゴリゴリと当てられて腰に電流が走る。

乳首への愛撫で散々高められた体は大袈裟に反応し、気持ちよさに勝手に腰が揺れてしまう。

「♡……♡♡♡」

「あ、腰揺れてる。自分からちんに擦り付けてるのかーわい♡」

「はっ……♡……♡あ♡」

「はー……えっろ……。そのまま腰へコへコさせてな。一緒に乳首もまた弄つてあげるから」

「あつ、おおあつ♡乳首……摘まれちゃ……んっ♡い、一緒にしちやったらくる、何かきちやいますうう……っ♡♡」

きゆう♡と両方の乳首を指で摘まれ、何かが入り込めてくる気がした。

体の中がぐつぐつと煮えたぎるように熱い。早くこの熱から解放されたくて、腰をもっとくねらせておちんちんにヘコヘコ媚びてしまう。

ぐちゅっ♡くちゅくちゅ♡くちゅ♡ぐちゅ♡

(ふっ♡うっ♡~~~~♡ち、乳首そんな風にまた指ですりすりされたらあっ♡♡だ、だめ、♡おまんこ、こうやってえ……おちんちん擦り付けるの気持ちいい……っ♡クリにがりつてあたると体ビリビリしゆる♡あっ♡えっちな液でぐちよぐちよになって、っ、すごい音してる♡あっ♡)

「あ、んふうづづっ♡♡おまんこも乳首もき、気持ちいい♡これ、もうだめえっ♡♡きちゃう♡」

「んー？お詫びなのに先にいきそうになってんの？そんなんで誠意が伝わってくる？」

「っ！はーっ♡あ……ご、ごめんなさい……っ♡で、でも、もっ♡はーっ♡お、おまんこ限界でえ……っ♡♡」

「ふはっ♡見たら分かるよ。もう下着、愛液で色変わって濃くなってるし。まんこひくつかせながら、びしょびしょに感じてるもんな」

「ひづっ！♡♡」

ぎゅっ♡とまた乳首を軽く引っ張られた。

もう絶頂の足音はそこまで来ていて。お隣さんの意地悪な言葉にすら、体がぞくぞく反応してしまう。

「あっ♡あぁ……っ♡」

「あー♡下着越しでこんなにぬるぬるになって……すっごいな♡」

「ひっ♡ひづっ♡イクっ♡お、おとなりさんごめんなさいっ♡も、イツちゃ……っ♡♡」

「いいよ。お詫びなのに先にイツてごめんなさいって、腰へコしながらまんこアクメきめな」

「……っは、い♡お、お隣さんへのお詫びなのに……あ♡おまんこすりすりして気持ちよくなってえ……っ♡ご、ごめんなさい……っ♡おまんこ、イクっ♡イクっ♡いきましゅ……っ♡♡あっあっ♡♡」

普段だったとしても言えないようなセリフ。なのに、頭の中が絶頂に向かう

ことしか考えられない。

早くこの熱を解放したい。もう少し。もう少しで。イク、イク——♡

「ほら、イケ♡」

ぐりゆうぐっ♡♡

「あっ♡……………っ♡~~~~♡♡」

ビクッ♡ビクビクビクッ♡♡ビクンッ♡♡

最後、クリを思いっきりカリで挟られて快感が弾けた。腰がブルブル震えて、声なき絶頂をキめる。

「おー、イッてる♡イッてる♡」

「あ、はっ♡あ…………♡♡」

子宮がキュンキュンして収縮が止まらない。

体を支えてた腕がもう限界で、かくんと崩れ落ちてしまった。お隣さんの胸にぺしゃりとうっ伏せになりながら、ふうふう息を整える。

「はあー♡はあー♡ご、ごめんなさい♡わたしだけイッちゃってえ……あっ♡」
「ほんと、俺のちんこそっちのけで、気持ちよさそうに全身ブルブル震わせてイッてたね」

「は、はい……♡ご、ごめんなさ……っ!？」

「まあ、別にいいんだけど。君のどろどろのイキ顔何回でも見たいくらい可愛
いからさあ……それに元々こっちでお詫びしてもらおうと思ってたし」

恍惚とした笑みを浮かべながら、ぐいとショーツのクロッチをずらされた。
ぬるぬるにぬかるんだおまんこの入口にくぼ……♡とおちんちんの先を押
し当てられる。さっきまでとは違う、布越しじゃない直に感じる熱さに息が詰
まった。

「イッたばかりでまんこひくついてる。入口くぼくぼしてちんこ誘い込んでん
じゃん。慣らさなくてもこのまま挿入りそ……」

そう言ってぬぽっ♡ぬぽっ♡とおちんちんの先端が浅く抜き差しされて。そ

の度にナカが奥深くまでくるのを期待して子宮がうずうずしてしまう。

「あ……お、おとなりさ……っ♡」

「はやと」

「っ？」

「俺の名前。隼人って言うんだ。もう知らない仲じゃないし、お隣さん、なんて言いづらいでしょ？隼人って呼んでよ」

唐突な自己紹介に一瞬目をぱちくりしてしまった。

お隣さんの言い分に、確かに……？とぼやぼやした頭は納得してしまう。散々恥ずかしい姿をさらけ出して置いて、まだ相手の名前すら知らなかった。

「は、隼人さん……？」

「そうそう。ねえ、君の名前は？なんていうの？」

「え、えっと……」

「ん？」と首を傾げるお隣さん……もとい隼人さんに見つめられ、もうここま

で来たら隠す必要もないかと私も素直に答えた。

「ちよ。……町田千代って言いま……す、うっ!?♡」

「っは、千代かぁ……かーわいい名前じゃん」

「っあ♡か、は……♡は、……あぁあ~~~~♡♡」

ぬぷぷぷ……♡

言い切る前におちんちんがゆっくり挿入され、素っ頓狂な声が出た。

ナカをミチミチと押し広げていく暴力的な熱くて硬いそれ。

油断してたおまんこも突然の質量にビックリして、軽くイッてしまう。

(お、おつきい……っ♡お腹のナカ、おちんちんでいっぱいになってりゅ……っ♡いれただけなのに、またおまんこイッちゃったぁ……っ♡♡)

「あーっ……ナカ、っ気持ちいい♡すげーヒクヒクしてるんだけど、もしかしてまたイッた？」

「ご、ごめんなさい……あっ♡ま、また、先に……っあ♡」

「それはいいけどさあ……これお詫びじゃないの？まだこれからののに、そんなへろへろで大丈夫？しっかり誠意が伝わるように、腰動かしてちんこ奉仕してもらわないといけないけどっ」

「あっ……♡」

促すようにとちゅん♡と軽く下から突き上げられた。まだ、ずっぽりとハマってるおちんちんの感覚に慣れてないのに。

「んっ、ふ……っ♡む、無理です……っは♡お、おちんちん、まだ挿入ったばかりだからぁ……っ♡♡」

「挿入ったばかりだから何？こんなに俺のちんこきゅゅ♡って締め付けて膣で大歓迎してくれてるのに、っ、何がっ！無理だって!？」

とちゅっ♡とちゅっ♡

「あっ♡あぁっ♡♡ごめんなさいっ♡しますっ、しますからぁっ♡♡」

経験したことがない質量に尻込みをして、つい弱音が飛び出した。そんな私を叱るように連続でおまんこをとんとんされる。

「く……………ぐ♡」

「ほら、上体起こして腕ついて……………そう。腰浮かしてちゃんと上下にふりふりして」

「……………ん、ふうっ♡」

そう促されてのろのろと上半身を起こす。ぺたりと隼人さんのふつくらと綺麗な筋肉がついた胸に両手を着いた。

ぬちゅ……………♡ずちゅ……………♡

「……………はっ♡……………あっ♡」

所謂、騎乗位の姿勢になってぎこちなく腰を揺らし始める。経験の無い体位に戸惑っていると、ペしりとお尻を軽く叩かれた。

「ん？なーにしてんの？もつとちゃんと腰動かして。これじゃお詫びにならねえじゃん」

「……っふ♡ごめんなさい……♡こ、この体勢……ん、慣れてないからあ……」
「そうなの？ははっ……経験浅くて可愛いな……。千代の好きに動いていいんだよ。腰ぐりぐり動かしてナカ、気持ちいいところ探しなよ」

「んっ……は、はい♡……っわ、わかりましたあ……♡あっ♡あっ♡ん、くう……っ♡♡」

「っ、そーそ。あー……腰の動きちよつとずつ大胆になってきた……♡」

隼人さんの言葉に後押しされ、徐々に動きを強めた。たん♡たん♡と腰を下に打ち付けているとまたお腹の下にじわじわ快感が募っていく。

隼人さんの声が吐息混じりの色っぽいものになって……私で気持ちよくなってくれてるんだと思うとなぜか嬉しくてまたナカがキュンと締め付けてしまう。

「はっ♡はっ♡あゝゝっ♡♡」

「っ、はゝゝ下から眺めてると絶景……♡胸ブルブル揺らしながら、っ、一生懸命腰へこつかせて……朝から刺激強すぎんな……っ♡」

「っ♡」

そう言われて更に体の熱が上がる。

窓から差し込む朝日のせいで、私の恥ずかしいところも多分丸見えになっていて。

爽やかな天気とは対照的に部屋の中はえっちな水音で満ちている。

この状況に背徳感が込み上げながら隼人さんをもっと気持ちよくさせたくて頑張って腰を振った。

とちゅ♡とちゅ♡♡ぞり♡♡♡

「あっ♡あっ♡……あ、……ふ、うづうっ!?♡♡♡」

「あ、その反応……まんこ弱いところ見つけられた?」

「あっ♡こ、ここ、ぞりってえ……♡♡♡」

「そ、Gスポット。ここ、カリでこうやって……ぞりぞりされると堪らないでしょ」

「ひっ♡ん、んううづっ♡♡♡」

ぷっくりと膨らんだそこ。おちんちんが掠めただけで電流のような刺激が走り、一瞬何が起きたか分からなかった。

「こ、これだめ……っ♡♡す、すぐいっちゃう♡刺激、強いからあ……っ♡」

「Gスポも初めて？腰、動き止まってるけど」

「ご、ごめんなしゃ……っ♡腰抜けて……っう、動かせな……♡♡」

おちんちんで少し擦られただけなのに、未知の快感に体の力が抜けていく。ここを連続で突かれたら……♡そう想像すると自分がどうなってしまうか怖い。思わず腰を浮かせてしまったその時。

「は？何逃げようとしてんの？」

どちゅっ♡

「おっっ!?♡ふっ♡う……っ♡~~~~♡♡」

ガク♡ガクガクガク♡♡

低い声でそう聞こえたと同時に目の前がスパークする。

腰を両手で固定され、ぱんっ！♡と下から思いっきり突き上げられた。つい先程覚えたばかりのGスポを容赦なくおちんちんでぶっ叩かれて、呆気なく絶

頂
す
る。
。